

児童生徒が自己の変容に気付き、 資質・能力を伸ばすための指導方法と評価方法の在り方

県総合教育センターカリキュラム開発部科学技術教育担当

1 はじめに

新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善や、学習評価の充実が求められている。一方、平成30年度全国学力・学習状況調査では、学習過程を見通した指導法の改善や、身に付けたことを生かす機会を設けることについて、本県は全国に比べて若干低い結果となった。また、児童生徒が、教員が思っているほどには、自分が教員から認められているとは感じていないことも分かった。

そこで、以前の調査研究で科学的思考力を高める効果があると分かった四つの学習ツールが、理科以外の強化においても、児童生徒が自己の変容に気付き、資質・能力を高めることにも効果があるのではないかと考えた。

2 目的

理科以外の教科で四つの学習ツールを活用し、児童生徒が自己の変容に気付き、資質・能力を伸ばすための方法を明らかにする。

3 内容

(1)四つの学習ツールの、理科以外の教科への応用を視点においた理論研究

(2)検証授業の実施と活用方法のまとめ
研究協力校

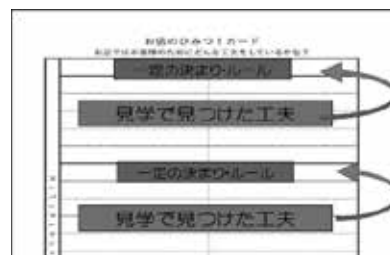
市原市立内田小学校、習志野市立秋津小学校、香取市立小見川西小学校、いすみ市立東小学校、鴨川市立鴨川中学校、浦安市立南小学校、柏市立光ヶ丘中学校、県立長生高等学校

(3)実践事例集の発行

4 四つの学習ツールの活用

(1)コミュニケーションカードの活用例

【小3社会 わたしたちのくらしとスーパーマーケット】



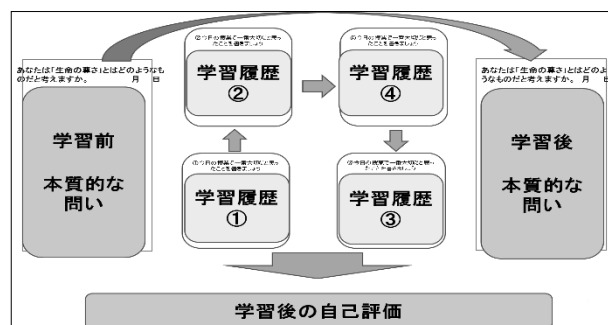
(2)自由記入式〇〇用紙の活用例

【小5家庭 かたづけよう身の回りの物】

かたづけよう身の回りの物 名前()	
【学】身の回りの整理・整とんせしよ【家庭】	
【めあて】 【達成イメージ】 ① ② ③ ④ 完成イメージ	【計画】 計画 【実行】 実行 思ったこと、考えたこと 思ったこと、考えたこと
【振り返り】 ※ Oをつけよう。 ○学習した整理・整とんの手段や方法を先かして、整理・整とんすることができたか。 ○学習した整理・整とんの手段や方法を先かして、整理・整とんすることができたか。 ○整理・整とんした場所を、使いやすい場所にすることができたか。 できた 少しでも できなかった	※ 文で書きましょう。 振り返り

(3)振り返りシートの活用例

【中3道徳 自然愛護・生命の尊さ】



(4)ループリックの活用例

【小4算数 式と計算の順序】

小単元 「計算のきまり」において作成したループリック	
基準	パフォーマンスの特徴を示した記述後
A	()を使うと1つの式に表したり計算の順序を変えられたりすることを考えられ、人に説明ができる。
B	()を使うと1つの式に表したり計算の順序を変えられたりすることを考えることができる。
C	()を使うと1つの式に表したり計算の順序を変えられたりすることを考えることができない。

5 まとめ ～四つの学習ツールの活用方法について

	学習資料について	見込まれる効果 活用のポイント・留意点	他教科での活用場面			
			導入	展開 話し合い活動 課題解決場面	まとめ	評価 (教師側)
コミュニケーションカード	○既習知識カード 本単元の学習内容に関わる前学年までの既習事項が簡潔に書いてある（理科では決まり、法則など）。予想、話し合い、考察などの場面で活用する。 ○問題・説明カード 単元で学習した発展的な内容に関する問題が書かれている。単元の終末に活用する。	○課題解決、話し合いのヒントになる。 ○話し合い活動が活発になる。 ○思考力、表現力を高める。 ○「コア知識」のように、幅広い事象に適用できる決まり（ルール）が存在する教科での活用が有効である。 ○既習知識が多くなる小学校高学年以降での活用がよい。		◎	◎	
自由記入式 ○○用紙	○もともとは理科学習の充実を目的としたもので、目的、予想、実験方法、実験結果、考察までを、子供が自ら考えて、自由に記入するシートである。 ○さらに、子供が表現したものを教員が助言、評価し返却する。 ○よく書けているものを掲示し、紹介する。	○課題解決力、思考力、表現力を高める。 ○学び方を学べる。 ○課題解決的な学習で使う。 ○各教科の学習過程を考慮した項目で作成する。 ○助言やよい内容に対する称賛、励まし等のコメントを入れ、返却する。 ○よく書けている用紙を紹介する。 ○できるだけ継続して使用する。	◎	○	◎	○
振り返りシート	○学習者が書いた学習履歴に対して、教師がコメントを書き、学習の質を高めるとともに、教師は、授業の評価と改善を行うことができるように構成されたシートである。 ○構成要素は次のとおりである。 Ⅰ 単元名タイトル Ⅱ 学習前・後の本質的な問い Ⅲ 学習履歴 Ⅳ 学習後の自己評価	○学習に対する姿勢、思考力、判断力、表現力を高める。 ○自己の成長や学ぶ意味がわかる。 ○教師がコメント書くことでさらに学習の質が高まる。 ○教師は授業の評価ができる。 ○単元構成がはっきりしていない教科では、大きくくりのまとまりでシートを作成するとよい。 ○気持ちや考えを正直に書くよう指示する。 ○生徒の考えを認め、励ますようなコメント、さらに深く考えさせるようなコメントを書く。 ○授業の始めに前時の子供の記述を紹介し本時に生かす。 ○授業者自身も振り返りシートを作成するとよい。 ○シート記入時間を確保する。	◎		◎	◎
ループリック	○評価の観点について「達成の度合いを示す数値的な尺度」と「それぞれの尺度に見られるパフォーマンスの特徴を示した記述語」で評価指標を設定し、マトリックス形式で示したものである。 ○パフォーマンスの特徴とは、文字や絵・図、音声、身体表現などの具体的な状態のこと。	○思考力、判断力等の質的評価がしやすい。 ○教師と子供が学習の目的を共有できる。 ○子供の学習意欲が向上する。 ○指導と評価の一体化が図れる。 ○ループリックの作成プロセスが教師の研修の場となる。 ○主に単元末やポイントとなる授業で活用する。 ○学習前に示したり、子供と一緒に作成したりすることもできる。 ○ループリックによる自己評価の時間を確保する。	◎		◎	◎

6 おわりに

四つの学習ツールは、理科以外の教科においても、各教科の特性や学習内容等に応じて構成や使い方等を工夫することによって、児童生徒が自己の変容に気づき、資質・能力を伸ばすために効果的であることが分かった。詳しくは、今年度末発行のリーフレット、及び千葉県総合教育センターWebサイト (<https://www.ice.or.jp/nc/kenkyu/>) に掲載の研究報告書をご覧ください、授業改善の一助として活用していただきたい。

不登校生徒の支援に向けた校内体制の充実のために

県子どもと親のサポートセンター支援事業部

1 研究の目的

平成28・29年度に先行研究として、小・中学校での学校不適応の児童生徒支援の在り方を追究した。これを踏まえ、本研究では、高等学校における不登校生徒の支援を充実させるための手立てを追究する。

(1)千葉県高等学校における不登校生徒の支援体制の現状と課題を明らかにする。

(2)高等学校が抱える課題に効果的と考えられる手立てを以下の3点より追究する。

- ①校内の組織的・計画的な支援の充実
- ②未然防止や早期支援
- ③不登校生徒への効果的な支援

2 研究方法

(1)研究 1

長期欠席生徒や校内体制等の状況について質問紙による調査を実施した。高等学校の不登校生徒に対する支援体制の現状と課題を把握した。千葉県内の全日制・定時制課程の高等学校(142校)を調査対象とした。

(2)研究 2

研究1の調査結果から、効果的と考えられる取組をしている高等学校を抽出し、聞き取り調査を実施して調査内容を分析した。

3 研究概要

(1)研究 1 現状と課題の把握

不登校生徒の支援に関する実態調査の結果、校内委員会（不登校生徒を支援するための組織を「校内委員会」と称する。）は、142校中131校の高等学校で設置されている。校内委員会で取り上げる議題や検討事項は、主として生徒の情報共有であり、生徒の支援方針の決

定や事例検討を行っている委員会は少ない。生徒の情報は、担任や養護教諭、学年主任から提供される場合が多い。校内体制を充実させるための課題や問題点については、「校内委員会を開催する日程の確保や調整」「組織で支援するための体制づくり」「教職員の多忙化・負担増」「教職員間の情報共有」「教職員の専門性や意識の向上」など多岐にわたっている。(図1)不登校の背景が多様化・複雑化する中、スクールカウンセラー(S C)やスクールソーシャルワーカー(S S W)との連携が求められる。

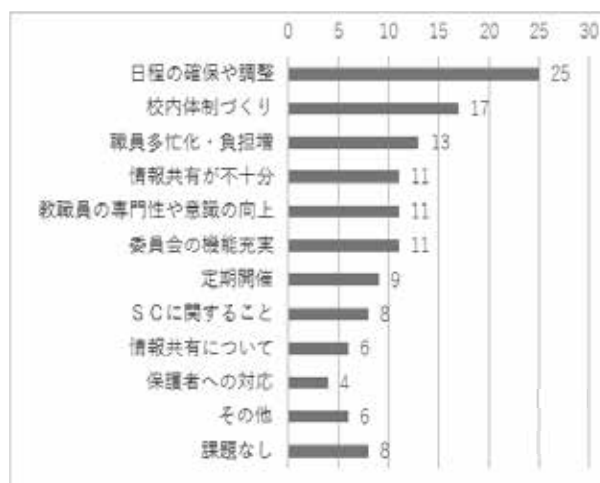


図1 校内委員会の課題や改善点

高等学校における不登校生徒の支援に関わる課題をまとめると次のようになる。

1 不登校生徒を支援するための効果的な支援体制づくり

- ・不登校生徒を支援するための組織づくり
- ・新たな不登校生徒を生まないための支援

2 教職員の専門性の向上と意識の醸成

(2)研究 2 効果的な取組をしている高等学校の実践

研究1での課題解決につながる次のような取組が見られた。

①不登校生徒を支援するための効果的な支援体制づくり

(ア)不登校生徒を支援するための組織づくり

【組織的な支援（A校）】

校内委員会を時間割の中に位置付け定期的に開催する。生徒の状況に応じて、校内委員会とは別に適宜ケース会議を行う。ケース会議では、生徒の情報を共有することに加えて、支援の方針を決め、学年団と連携する。コーディネーター役になるSSWの資格をもつ教員と生徒指導副部長、学年副主任が教育相談の中核となるだけでなく、管理職も構成メンバーに入っていることから、支援方法が速やかに決定でき、迅速な支援につながっている。

(イ)新たな不登校生徒を生まないための支援

【入学前の情報収集とその活用（B校）】

中高連絡協議会への参加や全ての新入生を対象にした中学校訪問、電話連絡により、入学前に全生徒の情報を収集する。また、保護者に入学前相談の案内をし、入学許可候補者説明会にて「保健面」「学習面」「生徒指導面」「発達面等の課題や配慮」の四つのブースを設けて、個別相談にあたる。さらに、入学直後と1学期中間考査後にアンケートを行った上で個人面談を実施し、生徒理解と学級づくりに生かしている。

②教職員の専門性の向上と意識の醸成

【教職員向けガイドライン等の活用（C校）】

校内委員会が中心となり学校独自の教職員向けガイドラインを作成し、教育相談的アプローチについて共通理解を図る。ガイドラインには、「生徒の支援は関係職員がチームで対応する」と明記されている。また、教育相談に関するハンドブックを作成・活用する。それとともに、教育相談に関わる研修を計画的に主催して教育相談のスキルアップに努めている。

4 研究のまとめ

(1)不登校生徒を支援するための効果的な支援体制づくり

高等学校における不登校生徒の効果的な支援体制をつくるために次の三つの視点が必要であると考ええる。

①役割分担を明確にした支援

校内委員会が中心となって支援方針を決め、役割分担を明確にし、学年団と連携できる体制をつくる。初動の対応を適切に行い、学年団が保護者や生徒と良好な関係をつくることができ、効果的な支援につながると考える。

②計画的に取り組む支援（予防的な支援）

入学前	・計画的な生徒の情報収集により適切な支援を考える。
1年次	・生徒の状況を把握し、生徒理解を深める。 ・職員間で情報共有し、適切に支援し、未然防止につなげる。

③進路変更をする際の支援

校内委員会に、多くの情報を持ち、他機関と連携して進路支援をする担当を置く。担当と担任・学年団が連携することで、生徒個々の状況に合った進路支援を行うことができる。

(2)教職員の専門性の向上と意識の醸成

不登校生徒を支援するためには、「教職員全体の教育相談の力量の向上」「計画的な教育相談コーディネーターの育成」が重要である。学校の実情に合わせて、当センターの各事業を積極的に活用し、教職員の教育相談に対する意識を高め、人材育成に役立ててほしい。

5 最後に

高等学校における不登校生徒の支援では、自校の生徒の特性や地域性など実態に即した体制づくりと教育相談における力量の向上が大切である。この報告が不登校生徒の支援体制づくりの一助となることを期待したい。